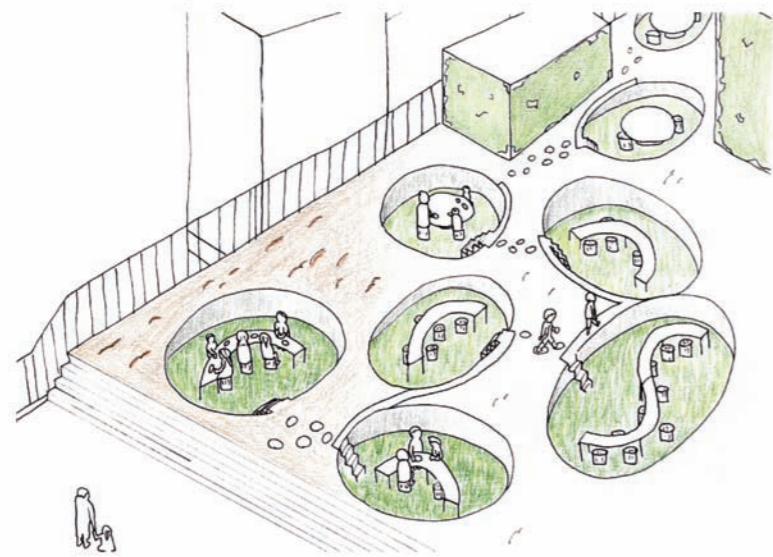


都市と農が人と人を繋ぐ



農業とは人の生活に必要な「衣・食・住」の「食」を支える重要なものである。それが人々から離れていくということが、どれほど大きな問題なのか気づいていない人は少なくないだろう。私はこの問題を、デパートの屋上を空き地と捉え、そこを市民農園レストランとすることで解決することを提案したい。

1. 空き地と農業

私は、空き地と農業は似ていると考えた。空き地には、休憩の場や子供の遊び場となり、快適な環境を作る役割がある。一方、農業には、居心地の良い環境を作る役割がある。だから、空き地と農業は似ていると言える。そんな空き地と農業の大きな違いと言えば、農業は食を支えているということだ。しかし、農業も高齢化による管理者不足によって、空き地へと変化している。

2. 農業の魅力と課題

農業において、高齢化は大きな課題だ。それは、農地が空き地へと変化していくと、作物の収穫量が減少し、さらに食料自給率が低下してしまうからだ。食料自給率というのは、食料消費がどの程度、自国の生産でまかなえているかを示しており、食料需給のあり方を考える上でも大切な指標である。だが、現在の日本の食料自給率は、先進国の中で最低の水準となっている。その原因は、畜産物や油脂などを多く摂取する食生活へと変わった、ということだ。これらの食品そのものや、その原材料を輸入に頼る場合が多いため、食料自給率が低下することとなるのだ。そこで私は、農業の魅力を活かし、小さな頃から農業に親しむことが大事だと考えた。農業の魅力としては、育てるという作業に成長する楽しみがあることや、作物ができたときに達成感を得られることなどが挙げられる。私は、その様な農業をすることによってたくさんの人たちが楽しめる空間を作りたいと考えた。

3. デパ屋の魅力と課題

「空き地とは何か」と尋ねられ、私は海岸や運動場など様々な場所を見つけ出した。そのなかでも、注目したのがデパ屋だ。デパ屋とは、デパートの屋上のことで、街の中にいくつもある。(図1)

数年前まで、屋上遊園地として子供に人気があったものの、現在では客足が遠のいている。最近、ビアガーデンとして客を集めようとしているが、それさえも客を集めることは難しいようだ。しかし、屋上というのは、遠くまで景色を眺めることができ、子供が好きな魅力のある場所である。だから、このデパ屋を活用したいと考えた。

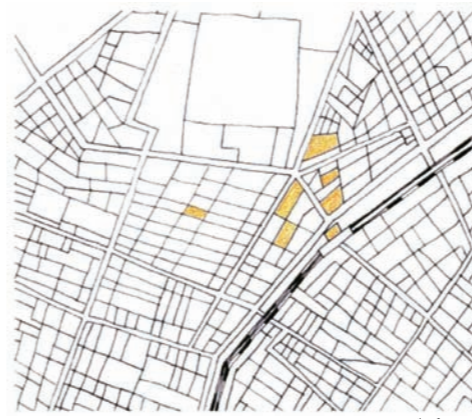


図1 街の地図

4. 農業 × デパ屋

デパ屋で農業を行うことで様々な課題を解決したい。農業の担い手不足や、デパ屋の廃れを、子供が集まりやすいデパ屋で農業を行い、その場で食べられるレストランを経営することによって、解決したいと考えた。具体的には、市民農園とレストランを合わせたものだ。(図2)

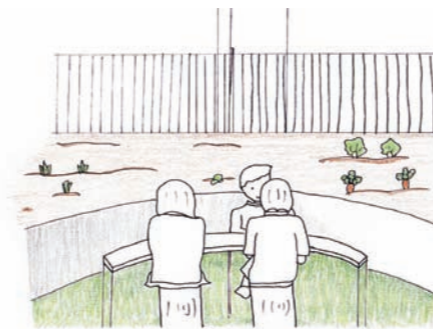


図2 都市農園レストラン

4-1. 市民農園

市民農園では、畑の共有をする。畑の共有というのは、客が作物の種や苗を持ってきて、いつもは店員に世話をしてもらい、店に来た時は自分で手入れをするというシステムだ。このシステムを利用していく中で、農業仲間ができ、より一層楽しむことができる。(図3) それに、2で述べたような育てる側しか味わうことのできないことも、経験することができるのだ。

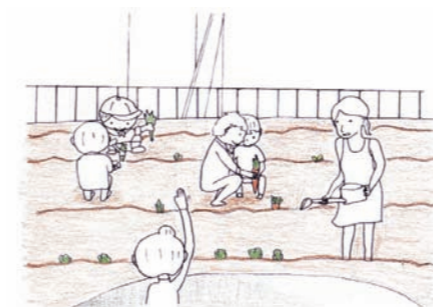


図3 都市農園を楽しむ様子

4-2. レストラン

レストランでは、育てたものを食べることができ、「見て美しく、食べておいしく」を実現することができる。食事のテーブルと畑の高さを近づけることで、農を近くに感じながら食事することができる。開放的な屋上では、室内のレストランよりも、自然環境を強く感じることができ、コミュニティの場にもなるだろう。上を見上げれば空が広がり、夜には星を見ることができる。夏はエアコンなしでも、緑が涼しい空間をつくる。

4-3. 活用方法

食農育というものがあり、これは、種をまき作物を育て、収穫して大切にいただくことである。食べるだけでなく、育てることから農業を知ってもらい、子供たちに感謝の心を学んでもらうものだ。(図4) 少子高齢化が進んでいく中で、この市民農園レストランを食農育の場として利用すれば、これからの農業を支えていくのにも役立つだろう。イベントとして、春には打ち上げや飲み会、夏はバーベキューや天の川を楽しんでもらい、秋はお月見、冬にはイルミネーションを行う。そして、年に数回行う収穫祭。このようなイベントは、利用する人を楽しませ、癒しの場やコミュニケーションをとるきっかけにもなる。やっと、都市と農が人と人とを繋げたのだ。

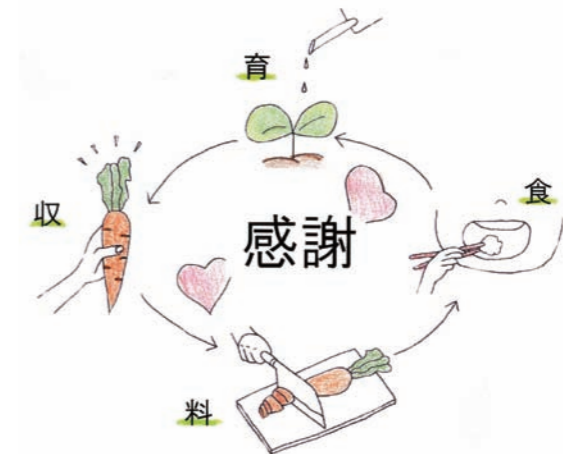


図4 食農育サイクル

5. まとめ

市民農園レストランは、「育てる」「見る」「食べる」ということを体験し、生きていくのに必要である「食」を近くで感じることができる。当たり前のように行っている食事が、どれほど大切でありがたいものなのかを、この市民農園レストランでは感じてもらえるだろう。まだ建物がない時代、そこに空き地はなかった。空き地が生まれたのは、建物があるということが、当たり前になった時である。空き地を生むのは多くの建物で、空き地を無くすのも建物しかないのだ。だからこそ、空き地を無くすのではなく、空き地を活用し、なくてはならない場所にするべきだと考えた。私はこの提案で、都市と農業との間には大きな隙間を、空き地が「カラの地」から、ソラのように誰からも好かれ、その隙間を埋める様な「ソラ地」になるようにしたい。